

Challenge

2009 女性のチャレンジ事例集

私たちのチャレンジの軌跡

市町長インタビュー



三重県

はじめに

日本の女性は人口の半分を占め、世界最長寿の健康に恵まれ、世界有数の高い教育を受けています。しかし、女性の能力は、今、社会で十分に活かされているとは言えません。

21世紀の日本は、あらゆる分野で新しい夢と希望を、新しいアイデアを、新しいエネルギーを必要としています。

女性のチャレンジは社会に活力を与え、ひいては、男性も元気にします。

こうした考えのもと、国では、意欲と能力のある女性が社会で活躍し、男性もゆとりある生き方をめざす、暮らしの構造改革の実現に向けて、皆様のご理解を得ながら、「女性のチャレンジ支援」を進めています。

いま国内では、少子高齢化が進み、経済情勢は厳しい状況が続いていますが、活力ある地域社会を築いていくためには、女性が自己の適性や希望を客観的に見極め、意欲や能力に応じて社会の様々な分野で活躍できる環境づくりが不可欠です。

このため、三重県では、女性が就業をはじめとした社会参画を通じて、自己の能力を十分発揮できるようにする「女性のチャレンジ支援」を進めています。

この事例集では、希望をもってチャレンジしている女性を、身近なチャレンジモデルとしてご紹介しています。三重県チャレンジサポーターが、様々な分野で活躍する女性たちを取材し、まとめました。また、基礎的自治体である市町のトップに男女共同参画についてのお話を伺った「市町長インタビュー」や、三重県が設置する「みえチャレンジプラザ」をはじめ、県内にあるチャレンジ支援機関等の情報も掲載しています。この冊子が、チャレンジを考えている女性たちにとって、自分に合ったチャレンジを具体的にイメージするヒントとなり、新たな一歩を踏み出すきっかけになれば幸いです。

目次

● 事例集「私たちのチャレンジの軌跡」

事例 1	松 葉 まち子 さん	4
事例 2	山 本 幸 以 さん	6
事例 3	牧 野 友 紀 さん	8
事例 4	佐 野 一 江 さん	10
事例 5	西 口 晶 子 さん	12
事例 6	古御門 侑 さん	14
事例 7	河 俣 由佳里 さん	16
事例 8	川 登紀子 さん	18
事例 9	大 西 宣 子 さん	20
事例 10	西垣戸 てい子 さん	22
	橋 戸 良 子 さん	

● 三重県チャレンジサポーターについて

● 市町長インタビュー

いなべ市	日 沖 靖 市長	26
菰野町	石 原 正 敬 町長	29
亀山市	櫻 井 義 之 市長	32

● 三重県内の主なチャレンジ支援機関

私たちのチャレンジの軌跡

輪は和なり
 ～ひとひとの出会いを大切に～



株式会社百五銀行
 事務統括部業務役
まつば こ
松葉 まち子さん

三重県いなべ市

プロフィール

いなべ市生まれ
 高校卒業後、百五銀行に入行。結婚、
 出産を経て、百五銀行初の女性支店
 長となる。
 現在は業務役として支店の指導にあ
 たっている。
 夫、長女、長男、義母の5人家族
 趣味は映画鑑賞、ミュージカル鑑賞、
 ゴルフ

株式会社百五銀行

所在地:津市岩田21番27号
 T E L : 059-227-2151
 H P : <http://www.hyakugo.co.jp/>
 ■2005年度「男女がいきいきと働い
 ている企業 三重県知事表彰(ベスト
 プラクティス賞)」受賞

仕事が好き、人が好き！

平成12年、百五銀行で初めての女性支店長となり、現在は事務統括部で業務役をされている松葉まち子さん。「とにかく仕事が好きなんです」と笑う。

高校を卒業後、先生に勧められるまま、百五銀行への入行を決めたそう。「当時は、銀行が何をするとところかもよく知りませんでした。今は百五で良かったな、と思っています」。入行後、3年目に結婚。当時は結婚したら仕事を辞める人がほとんど。ですが、松葉さんは「同期が同じ支店に7人もいて、すごく仲が良かったの。とにかく仲間と離れるのが嫌で、仕事を続けていました」。

負けず嫌いかもしれません

そんな松葉さんも、妊娠中のつわりが辛い時期だけは仕事を辞めたいと思ったことがあるそうです。当時勤めていた支店までは車で片道30キロ。運転中に何度も気分が悪くなり、それまでのように元気に働くことはできなくなりました。「つわりがひどい時に勤め続けた初めてのケースなんじゃないでしょうか。何度か辞めようと考えましたが、自分が『落ち目』の時に辞めたくなかった。辞めるのはいつでも辞められる。いけるところまでいってみようと思ったんです」。体も気持ちも辛い時があったそうですが、夜になると励ましの電話をくれる上司がいたことや、妊娠中に自宅近くの支店に異動になったことで仕事を続けることができました。当時の産休は6週間。42日後の職場復帰の日を計算して準備をしたそうです。同居されているお義母さんも、「わたしにできることはみんなやっただけよ」とバックアップしてくれたそうです。

通勤前に病気の子どもを病院に連れて行き、帰りはお義母さんとバスで帰ってもらったこともありまして。「本当は待っていて、一緒に連れて帰りたけれど、言い出せなかったですね。あのころは、子どもがいるのに勤めを続ける人はいなかった。だからこそ、『子どもがいるからあの人のはだめだ』とは言われたくなかったんです」。

寝る時間を確保するだけで精いっぱいという忙しい中でも、お子さんのお弁当づくりだけは欠かさなかったそうです。「母親らしいことがなかなかできないので、これだけは作ろうと」。

人の和（輪）を大切に

お客さんと話ができる窓口の仕事は、とても楽しかったそうです。「お客さんに良くしてもらって、頭取表彰を連続で受けたりもしました。私としては、与えられた仕事を一生懸命やってきただけ。ただ、後に続く職員を育てることには力を入れました」。松葉さんの後輩たちの中には、現在支店長代理のポストを任されている方もいます。「それはすごくうれしいこと」と松葉さん。百五銀行内では、資格を上げるためには試験を受けることも必要だそうです。これは男性も女性も全く同じ。「チャンスは平等に与えられています。せっかくある制度なので、受験しなくてはね」。

支店長という仕事についても、「男の人にまけたらいかんとか、上に上がりたいとか、そういう意識はないんですよ。上に引っ張り上げてもらって、下から押し上げてもらって、まわりにそういう風にしてもらった」とにこやかに語ります。仕事をするうえで、何よりも大切にしてきたのは人の和（輪）だといいます。

あとに続く後輩へのメッセージ

仕事を続けるか辞めるか悩む後輩には、「『こんなにもいい職場はないから勤めなさいよ』って言うんです」。仕事をしてきたことで社会とのつながりを感じ、さまざまな立場の人と話をすることで自分の世界を広げていった松葉さん。「勤めていて良かった、その思いはみんなに伝えたい。（仕事をする、しないの選択には）いいところも悪いところもある。とにかく、自分の選んだ道が一番良いと思えるような選択をしてほしいです」。また、「子育て、介護、病気など、心配事は考えればきりが無い。完璧でなくても、その家が回っていけばいいんです。なんとでもなる、と思わないとね」。

休日には映画観賞や観劇を楽しみ松葉さん。「はりつめた弦のようではだめですよ。いつか切れてしまう。時々は緩めてやらないとね」とにっこり。きちんと休息をとり、めいっぱい遊ぶことも、いきいきと輝いていられる秘訣なのかもしれません。

(2009年9月取材)

チャレンジの歩み

- 1973年 百五銀行桑名支店に入行
- 長女、長男を出産
いずれも産後6週間で職場に復帰
- 2000年 百五銀行初の女性支店長となる(桑名大山田支店長)
- 2003年 大安支店長
- 2006年 蓮花寺支店長を歴任
- 2009年 これまでの経験を生かし、支店の指導にあたる



自分を信じて
チャンスをつかむ!!



有限会社オールピー 代表取締役

やま もと こう い
山本 幸以さん

三重県四日市市

プロフィール

生まれ 伊勢市
家族 父、母、姉（現在は一人暮らし）
趣味 料理・旅行
現在 有限会社オールピー代表取締役
社会貢献活動「39の輪」代表
タイ式マッサージセラピスト・スクール校長
ヨガインストラクター

こりとりらくだ

所在地:四日市市芝田1-10-3
(シェトワ白揚敷地内)
TEL:059-351-1579
HP: <http://www.thaishiki.rro.jp>

カイロプラクティックの勉強を始めたのは…直感!

タイ式マッサージセラピスト、セラピストスクール事業、店舗ビジネス、女性支援事業、社会貢献活動（39の輪）など幅広い活躍をされている山本幸以さん。

よくしゃべり、よく笑い、明るく楽しい！このエネルギーはどこから出てくるのか、不思議な方です。高校卒業後、初等教育学を専攻。幼稚園教諭、小学校教諭の免許を持っていながら、一般企業に就職します。OL生活は2年半で終止符を打ち、カイロプラクティックの勉強を始めます。なぜカイロプラクティックなのかと尋ねたら、「“直感”かな。目の前にあったカイロプラクティックがいいと思った」という返事。このルーツは子どもの頃、ご両親にマッサージをして喜ばれていたことや、人助けが好きな祖父の影響を受けているところにあるようです。

カイロプラクティックを始めたころは、まだまだ「あんま」「マッサージ」が一般的な世の中。幸以さんは、しっかり勉強をしたいと決断し、ハワイにも足を運ぶようになりました。

カイロプラクティックは体の歪みを直すというイメージですが、1993年、幸以さんが着目したのは脳へのアプローチで、人間が本来持つ自然治癒力で機能を回復させようとするものです。



カイロプラクティックからリラクゼーションへ

カイロプラクティックの資格を得て、実家の志摩でカイロプラクティックサロンを始めます。地元では大変な人気で反響を呼んでいたそうですが、東京や大阪などに行くと、「15分ですっきり」とアピールするお店が出ていました。

「ストレスが多い現代人。仕事帰りに、しかも短時間でリラックスでき、爽や

かに家に帰れたら、素敵じゃない！」そのような思いにかられて1996年5月、県内初のクイックマッサージ店「こりとりらくだ」を四日市にオープンさせます。

タイ古式マッサージを取得

1999年、「こりとりらくだ」のメンバーの提案に直感でひらめき、なんとその1週間後にタイへ「ヨガ」をルーツにもつタイ古式マッサージの修行に出ます。フットポーの寺院での修行は“すべて体で会得する”という、厳しいものであったそうです。

帰国後すぐに、「こりとりらくだ」を「タイ古式マッサージ店」にリニューアルします。人の出入りが多い四日市市内中心部の大型書店の駐車場が適地と決めた幸以さんは、彼女の持ち味でもあるパワフルなエネルギーで交渉。書庫であった場所を借り受け、心安らぐマッサージサロンに変身させ、オープンにこぎつけました。

2003年には、タイ式マッサージスクールの運営を開始、同年に会社を設立。このことをきっかけに、人材の育成と後輩を育てる事業をスタートさせました。

2005年、ハワイに提携会社をもち、ハワイのマッサージスクールへの留学のサポートも開始。このタイ古式マッサージを核にして、現在はヨガスタジオの運営のほか、愛知と三重の中日文化センター、名鉄コミュニティサロンを始めとする施設で、ヨガとフラダンスを中心とするクラスを月に50クラス以上開講しています。

また、東海テレビで1年間、レギュラーとしてヨガ番組に出演。それに加えて、愛知県ではイベントセミナーに数多く参加し、県内では、小学校、幼稚園から依頼を受け、“親子のコミュニケーションとしてのヨガ”のイベントを開催して子育て支援に力を入れています。

一方、志摩市では女性起業家としての講演活動、伊勢新聞「みえの経済」にはマッサージスクールの経営者として掲載されました。

チャレンジの歩み

- 1992年 日本とハワイにてカイロプラクティックの勉強を始める
- 1993年 自宅にてカイロプラクティックサロンをオープン
- 1996年 四日市で初のリラクゼーション施設「こりとりらくだ」をオープン
- 2003年 会社設立
マッサージスクールの開校
- 2005年 名古屋にホットヨガスタジオオープン

未来の子どもたちのために—「39の輪」

いろいろな方面で積極的に活動している幸以さんですが、社会貢献にも力を入れています。39才になる年に「39（さんきゅう）の輪」を発足しました。

健康で生まれ、家族に恵まれ、今生かされていることへの感謝を形にしてお返ししなければと思ったからだそうです。共感してくれた仲間のお陰で、39の輪は加速して広がり、大きなイベントも開くことができました。

「『幸せなオトナが増えれば、幸せなコドモが増える』をテーマに、現代人が失いかけているものをもう一度伝えていきたい。人との出会いを大切に、いろんな体験をしてほしいと思っています。生き抜く力は、人と関わることで豊かになるでしょう」と幸以さんは熱く語ります。

「笑いあい」、「助けあい」、「感謝しあい」・・・3つの愛で大きくしていきたい。

山本幸以さんは“人と人をつなぐ達人”です。

(2009年9月取材)



川越町バドミントンスポーツ少年団

オリンピック選手を育んだ



川越町バドミントンスポーツ少年団代表

まきの ゆき
牧野 友紀さん

三重県三重郡川越町

プロフィール

生まれ 1970年三重郡川越町
職業 保育士
家族 夫、長女、長男、義母
資格
日本スポーツ少年団認定育成員
少年スポーツ指導員
公認コーチ(バドミントン)
レクリエーションインストラクター
日本バドミントン協会公認3級審判員
幼稚園教諭2種免許
保育士

『世界のオグシオ』とも言われたバドミントン選手の小椋久美子さんをご存知でしょうか？川越町で生まれた小椋さんがラケットを握り、サーブを打ち始めたのは、「川越町バドミントンスポーツ少年団」です。牧野友紀さんは、現在この少年団の代表として活躍されています。

バドミントンとの出会い

牧野友紀さんは、小学5年生の時に友だち5人とこの少年団に入団しました。その頃は、試合より団員達と公園でゲームをしたことやキャンプに行ったことが楽しい思い出として残っています。

中学校ではバドミントン部が無く、ハンドボール部に所属。でも、高校生になったら迷わずバドミントン部に入部しました。バドミントンはシャトルを打ち合うときや試合のかけひきがおもしろく、特にダブルスでは、パートナーとのコンビネーションや位置関係がかぎになり、シャトルの高さや速さを変え、複雑なラリーになります。相手コートの誰もいないところにショットを決めたときは快感です。

指導者としてのきっかけ

高校を卒業しても、大好きなバドミントンを続けたい一心の友紀さんは、成人のバドミントンクラブに入部します。その時、川越町バドミントンスポーツ少年団の男性指導員（現在：友紀さんの夫）から、「中学生の指導をしてみないか」と声をかけられました。その当時の友紀さんは、人と話をするのも苦手で、声もかけられずにコートの後ろで立っている日が多くあったようです。

しかし、友紀さんはお姉さんのような存在でなく、指導者としてもっと力をつけ、きちんとやりたいと思い、19歳でスポーツ少年団認定指導員、20歳のときに日本スポーツ少年団認定育成員の資格をとります。

指導員に男女差はなく、女性も活躍できると実感しました。試合に勝ち、強いチームをつくることはもちろんのことですが、どこへ行っても恥ずかしくないようにと、挨拶、会場へのお礼、体育館の清掃はもちろんのこと、トイレ掃除も徹底しています。『来た時よりも美しく』を団員に教え、マナーも守れる

よう指導をしています。

バドミントントレーニングの一つとして、ビジョントレーニングを取り入れています。動体視力をつけ、集中力を高めることがねらいです。単調な練習の繰り返しですが、その繰り返しの中に日々向上があるようにと、練習ノートを活用しています。

ノートには、それぞれの個人の目標を記入し、その日の練習を振り返り、よかったこと、よくなかったこと、教えてもらったこと、質問したいことなどを書かせています。ノートは練習のたびに提出してもらい、コメントして返します。練習ノートやレクリエーション活動を取り入れることで、団員の気持ちもわかり、絆が深まっています。

小椋久美子さんの印象

バドミントン選手として有名な小椋久美子さんは小学2年生で入団し、とても笑顔がかわいい女の子でした。友紀さんは直接の指導はしていないと話されていましたが、とにかく負けず嫌い、あきらめずに取り組む姿が印象的だったそうです。強い相手に何度もチャレンジするうちに、彼女はオリンピック出場を目標にしていました。本人の努力はもちろんですが、刺激しあえる同年代の仲間や強い先輩がいるという、常に競い合える環境が、がんばる小椋さんを育てたと思います。

「Let's try go go!!」このマークは、少年団出身者がバドミントンのシャトルをデザインし、小椋久美子さんの自筆を添えてシンボルマークにしたものです。これをユニフォームにプリントしています。

Let's try go go!!

(～さあ、やってみよう～)

『やる気』を出して『根気』よく、『勇氣』を出して『強い気持ち』で、何事にも挑戦していこう、勝利を目指して…



(川越町バドミントンスポーツ少年団のモットー)

これからの夢

「川越町バドミントンスポーツ少年団は私たち夫婦と3人の指導者で行っています。団員の技術や体力の向上で、小椋久美子さんのような強い選手を育て、全国大会に出場するのが夢です。

団員の子どもたちには、思いやりや感謝の気持ちを大切に、素直に成長することを望んでいます。また、自分で考え、判断できる人になってほしいと思っています。

バドミントンがもっともっとメジャーなスポーツとして進展するよう、いろいろな地域で指導者になって活躍してくれることを願っています。

私自身も団員から教わることもたくさんあるので、伝統にとらわれず、新しい意見・技術を取り入れる努力をし、自分自身も成長していきたいと思います。」

(2009年10月取材)

チャレンジの歩み

高校卒業後、川越町バドミントンスポーツ少年団の指導員となる

日本スポーツ少年団認定育成員、公認コーチ(バドミントン)等の資格を取得

保育士として勤務する傍らバドミントンの指導を行う



無理せよ、
できる範囲で目標を持って



株式会社佐野組 取締役

さ の かず え
佐野 一江さん

三重県亀山市

プロフィール

1952年 広島県生まれ
株式会社佐野組取締役として、夫とともに土木建設業を営むかたわら、新規事業開発をめざしてダチョウ飼育を始める。
ダチョウの卵を使った洋菓子は、農協直営の「ファーマーズマーケット果菜彩」で販売しているほか、卵の殻にアクリル絵の具を使って描くエッグアートも制作している。

株式会社佐野組

所在地：亀山市小川町2375
TEL：0595-85-0310
FAX：0595-85-2174
ファーマーズマーケット「果菜彩」
HP：<http://www.ja-suzuka.or.jp/kanasai/index.htm>

だちょうのケーキ屋さん

小さな頭に大きな目と平たいくちばし、長い首の下には巨大な体と2本の頑強な足がある。このユニークな体の持ち主～ダチョウ～の卵から、洋菓子やエッグアートを生み出しているのが佐野一江さん。冬期を除くほとんど毎日、農協直営の農産物直売所「果菜彩（かなさい）」に「だちょうのケーキ屋さん」という店を出し、クッキーやケーキなどを販売しています。おいしさやアイデアの良さで、お店に出せばすぐに売り切れるほどの大盛況。

「他人が真似できないことをやりたかった」、そう言わせるのは、一江さんが生きてきた人生そのものだったのかもしれない。

いつも幸せを感じながら

一江さんは広島で生まれました。母親と祖母が被爆後遺症に苦しみ、生活がままならない中、一江さんが3歳の時、一家は三重県四日市市に移り住みました。この新天地でも父親の病気で商売が破綻し、貧しい暮らしを余儀なくされます。後年、「つらい生活で苦勞をかけたね」と母親から言われましたが、「この頃が一番幸せだった気がする」と振り返ります。

「学校の勉強でも運動でも、コツコツと努力しなければ他人についていけなかったから」と何事にも真剣に取り組むことを身につけてきました。また、近所の洋服店から針と糸をもらったことが嬉しくて洋裁に興味を持ち、「いつか自分も服を縫いたい」という夢を抱き、貧しい生活の中にあっても身近なことの中から喜びを見いだすことができました。

新たな生活の中で

友人の紹介で知り合った夫と結婚したのは21歳の時。築150年の田舎の家に嫁ぐことに、当初父親は大反対でしたが、一江さん自身は農村での生活は魅力に思えました。結婚して1年後、好きな洋裁だけしていればいいと言ってくれた夫が、家業の土木建設業と農業を継ぐことに。

全く経験のない中、同業者などにイチから教わりながら苦勞を重ねていく夫



の姿を見て、尊敬すると同時に「自分も何か夫の助けになることを身につけなければ」と、建設業経理事務士をはじめ、1級土木施工管理技士、1級管工事施工管理技士、1級造園施工管理技士など、土木建設業に必要な資格取得に次々に挑戦していきます。

家では、旧庄屋のおかみとして切り盛りしてきた義母からの要求に振り回され、若い一江さんにはつらいことも多くありました。「自分が今あるのはいろいろ教えてくれた義母のおかげ」と今では深く感謝していますが、当時は負担を感じ始めていた頃でもあり、それから逃げたいという思いもあったのかもしれないといいます。

真にやりたいことがしたい

「仕事は楽しかった。何科目目の試験に合格するため、毎日勉強することも苦にならなかった」。時間を忘れて没頭しましたが、積み重なる無理がたたったのか、癌のため2回入院することに。それでも、夫は現場、自分は事務と分担していたため、事務だけは完璧にこなそうと、入院先にまで仕事を持ち込んで書類を作ったりもしました。退院後も思うように仕事ができずに落ち込む自分を見て、夫は「それでいい。やっと普通になった。間違えたら間違えただけいい。書類を出すのは何日かかってもいいから」とやさしく励ましてくれました。

また、同じ病室の人たちと話をしている、彼女たちがとても自由に生活しているように見えたといいます。それに比べ、入院しているのに提出期限を気にして書類作成に必死になっている自分を見て、あまりにも「こうすべき」と型にはまった生き方をしてきたことに気づきました。

「命には限りがある」と思い至った時、自分が真にやりたいことをやってみたいという思いが湧いてきました。そんな時、造園業をしている人が新規事業としてダチョウ飼育を始めたという雑誌記事を目にします。雄はオーストリッチとして革製品に、肉は食用に、体の脂はクリームに、羽根は高級車の毛ばたきに……。体のすべてが使えるすばらしい鳥がいると知り、「これだ!」と思ったそうです。

早速、ダチョウを飼っている人のところへ出かけて話を聞きました。ダチョウは肉を売るのか、卵を売るのかによって与えるエサが違うこと、卵にしても繁殖やお菓子作り等の用途があることも知りました。飼育環境のアドバイスなども参考に家族で相談した末、管理栄養士の資格を持つ三女と一緒にお菓子を作ることに決め、雄1羽、雌3羽のダチョウを購入。自宅近くの山中に小屋を用意して飼育を始めました。

ダチョウの卵を使って、工夫を重ねて作り上げたクッキーやケーキ。直径15センチほどの卵の殻にアクリル絵の具でメルヘンの世界を描くエッグアートも始め、遠くから買いに来る人も増えています。赤字にだけはならないように慎重に考えて始めましたが、順調に売り上げを伸ばし、高いエサ代も今では軽くまかなえるようになっていきます。

これからの夢

「無理せずに、できる範囲で目標を持ってコツコツとやっていきたい」と遠慮がちに将来のことを語る一江さん。それでも、ダチョウの数を増やして「ダチョウの卵で作ったお菓子が、亀山の特産品として認められれば嬉しい」と夢を膨らませています。コツコツ努力し、決してあきらめない姿勢を貫いてきた一江さんなら、いつかその夢を実現させていくに違いありません。終始明るい笑顔で話す一江さんは、「家族の太陽のような存在でありたい」という言葉そのままの人でした。7人の従業員にも自分の姿を通しながら、副業として何かやれる力を培っていくよう話をしています。

今、一江さんは、大地にしっかり根を下ろし、真似できないような自分独自の大輪の花を咲かせていこうとしています。

(2009年9月取材)

チャレンジの歩み

1級土木施工管理技士をはじめ、土木建設業に必要な資格に挑戦し、次々に取得する。

癌のため2回の入院を期に、それまでの生き方を振り返る。

新規事業開発として、雑誌で知ったダチョウ飼育を始める。



すべてが次につながるチャンス

ひとみ
かがやき
えが
あふれる



津市立明小学校 校長
にし ぐち あき こ
西口 晶子さん

三重県津市

プロフィール

津市在住

1980年に四日市市立浜田小学校から
教員生活をスタート。

1994年から三重県教育委員会事務局
へ。途中、学校現場への異動も挟みな
がら、教育行政には11年間携わる。
2009年4月から現職。

津市立明小学校

所在地:津市芸濃町林325

T E L : 059-265-2106

F A X : 059-265-4955

H P : <http://www.res-edu.ed.jp/akiras>

先生を目指したのは？

子どものころに通ったピアノ教室で、「人に教えることっていいな」という気持ちが芽生えました。当初は音楽の道への大学進学を目指しましたが叶わず、方向転換を余儀なくされました。そこで小学校教員を目指し大学に進学。新たな道を歩むことになりました。しかしこれまでの学びは無駄にはなりません。むしろこの経験は、子どもたちに「何があっても、また次のことにチャレンジすることができるんだよ」と話す後ろ盾になっています。

「自分の思いとは異なる環境変化が生じて、一歩踏み出せば次のステージで経験が生かされる」と、仕事を続ける中で実感してきたことでもありました。

教員生活、結婚、出産、そして

1980年に教員生活がスタート。結婚し、第一子を出産しました。当初は早く職場復帰をと思い、半年間の育児休業を予定していましたが、しかし育児5か月目に子どもが百日咳になり、当時の制度として最長の1年間に延長することに決めました。日一日と成長する子どもの姿は目ざましく、この期間を親子とともに成長できたのは本当によかったと思っています。

教員生活の中断は子どもたちのとのかかわりも途切れることになることから、復帰への不安はありました。しかし今、同様の体験をしていく後輩には「大丈夫、きっとその経験は宝なのよ」と言える自分がいます。また同僚の方たちにも「みんなで暖かく見守りましょう」と思ってほしいと考えています。

第二子を出産した際は、一年間の育児休業を取りました。復帰後は夫や両親が理解・協力して支えてくれましたが、子どもが病気がちだったため、病院から出勤したり、また病院で仕事をしたりということもありました。思い出すのは、子どもが入院しICUに入った時、どうしても外せない仕事があり、「子どもが大変なときなのに・・・」「でも、行かなければ・・・」と家族とともに苦しみ、悩み、話し合ったすえ、祈る気持ちで仕事に出かけたときのことで。そんな時も家族の支えで乗り切っていました。教員として仕事に打ち込む自



分の姿に、家族がそして同僚がエールを送り支援してくれる、そんなことで生かされてきました。働く女性は、生き甲斐としての仕事を、人と制度の支えで全うできるのです。

学校現場から教育行政へ

1994年に学校現場から、三重県教育委員会事務局指導課へ異動。研修員という立場でしたが、当時そこには小中学校教員経験者の女性は一人もいませんでした。残業も多く時間的に厳しい職場が女性に務まるのか？といった意識も周囲にはあったかもしれませんが、大好きな学校現場から離れることにもなりましたが、女性の私が、ここで仕事をしていくことが、次の人につながるのだと思い勤務しました。2年後には指導主事へ昇格。教育行政には計11年間たずさわりましたが、その時踏み出した一歩は、現在にしっかり引き継がれています。

名前のおり明るい学校へ

2009年4月、校長となり初めて津市立明小学校に赴任しました。管理職になることを特に「目指そう」と意識したことはなく、教育委員会事務局と一緒に勤務する男性と同じように、自然とその道を歩んでいました。

赴任してみると、明小学校にはたくさんの宝がありました。学校林「明の森」や「青い目の人形(※)」、夏の夕方花咲く「ゆうすげ」、学校の隣には国の登録有形文化財「旧明村役場」等があり、歴史と自然が息づいています。今年は「青い目の人形」を通じて、様々な出会いがありました。地域に受け継がれてきたものを、地域の協力を得ながら大切に子ども達に引き継いでいきたい、そこには「学校が明るく輝けば、地域にも何らかの影響があるのではないか」という思いがあります。

続けていれば、道は次につながる

これまで、人との出会い、縁を大事にして生きてきましたが、同じ学校で働く先生には、次の二つを心がけてほしいと思っています。

一つ目は「自分自身が元気でいてほしい」。人にかかわる仕事は、元気であればこそ相手に伝わっていくと考えるからです。

二つ目は「自分という人間を高める努力をしてほしい」。子どもの前に立った時、子どもは無言で「先生ってどういう人間なの？」と問いかけてくるといいます。

自分を大切に、毎日少しずつ地道な努力をして仕事を続けていくことは自分自身の社会参画にもなります。これは駄目かなと思っても必ず次につながるから、どんなことでも長く続けていってほしいという思いは、職場の先生に限らず、すべての人につながるのではないのでしょうか。

明小学校は、これからいろんなことが出来る素敵な学校です。一人ひとりの子ども達が、明日もこの学校に来たいなと思える、また保護者の方々に安心してもらえる学校にしたいと、その思いはつきません。(2009年8月取材)

※「青い目の人形」とは

昭和初期(第二次世界大戦前)に、親善活動として米国から日本の子ども達に贈られた人形のこと。(その返礼として、答礼人形が日本から米国に贈られている。)太平洋戦争中に敵国に関わるものとしてその多くが処分されたため、現存する人形は少ないが、日米親善と平和を語る資料として各地で大切に保管されている。

チャレンジの歩み

大学進学にあたり、音楽の道から方向転換。小学校教員を目指す。

1980年
教員生活スタート。四日市市立浜田小学校、鈴鹿市立長太小学校等へ赴任。

第一子出産。半年間の育休予定を1年に延長。第二子出産時も1年間の育休取得、そして職場復帰。

1994年
三重県教育委員会事務局指導課へ異動。学校現場だけでなく教育行政も経験。

2009年
校長として津市立明小学校へ赴任

